

## 次の社会への提案 道徳社のすすめ

道徳の危機である。

美しくない文体にて失礼いたします。もはや官僚のようにタテマエにとらわれている場合ではない。

健康な生活をする。平和な社会にする。

健康な生活とはどういうものか。平和な社会とはどういうものか。体内と世界に感謝する。

ともかくにも、健康平和交流が必須である。

資産増殖思想や国民国家思想とは別に、ひとりひとりが想う健康平和学の規律を普及しあう交流。そのための通信と会場。そういう健康平和交流が必須である。

健康平和生活の最高品質最低費用をめざして切磋琢磨する交流が必須である。

健康な家庭とはどういうものでしょうか。諸民族調和はどのように可能でしょうか。生産調和体とはどういうものでしょうか。たとえば資産増殖のための恋愛か、健康な出産と保育のための恋愛か、情念の伝統と創造のための恋愛か。

宗教を信じるも信じないも自由。宗教を信じるならどの宗教を信じるも自由。そして教育勅語を信じるも信じないも自由。日本神話を信じるも信じないも自由。一方、マルクスに学ぶも学ばないも自由。

現実論の健康平和学とはどういうものか。

現実論の世界観と論理学とはどういうものか。

自分の認識の限界を自覚する謙虚さとはどういうものか。

矛盾を解決していく情念や思考とはどういうものか。

やすらぎの冥想とはどういうものか。  
無自覚な架空論から卒業する。

もとより、ひきこもりのような山田 学にくだわる必要はない。JOMON  
あかでみにくだわる必要もない。

必要なのは、人権思想に調和する日本民族の道徳を自由に創ることなのだ。そのための通信と会場なのだ。それが市場経済に安息を注入するのだ。そういう通信と会場を道徳社と呼ぶ。

ほらそのありふれたチエーンストアもあなたの道徳社に創りかえていけるのだ。地球の宗教史と民族史を知ることが環境問題と平和問題への入門な

のだ。

神道の神社を尊重しつつ、神道にも特化しない、道徳社のすすめ。社はもともと、安心のための仮設の建築という意味なのだ。

福沢諭吉先生の『学問のすすめ』の時代は終わった。もはや欧米の物理学や経済学が行き詰りはじめているからなのだ。この道徳の空白の時代に、不肖、山田 学がもの申す。

道徳社のすすめ。

特定の道徳のすすめではない。ひとりひとりが自分なりの道徳を創りあっていく使いあっていく過程にこそ意義があるのだ。そのための通信と会場にこそ意義があるのだ。もとより、道徳の高みというものには限りがない。それについてには偏差値の高い学校を卒業できた人もできなかった人も平等。また、道徳の高い人ほど、人に接するとき腰が低いはずである。

人を殺したり自分が死んだりしても、もちろん、問題の解決にならない。道徳の空白に不平不満を表明しあうのみの無道徳より、自分なりの道徳を創りあっていく使いあっていく自由を。脱政治の道徳経営運動を。なお、道徳社は政治運動でないが、道徳社運動を妨害する政治があるとしたら、その解消を訴える。

道徳社は、排他的な諸思想・諸宗教にとっても、社会見学の場であればよい。ただし、道徳社において、自由と平等と健康平和の妨害は、お断りする。建築や運輸や通信の技術が発達すれば、血縁より地縁、地縁より通信縁が、大切にもなる。道徳社は、道徳推進であるとともに、情念融和の最高品質最低費用も、追求する。大きく和する大和である。

われわれは諸偉人の原点に学ぶべきである。ただし、親鸞・道元・日蓮という諸偉人の調和がない限り、日本民族の平和はないであろう。孔子・シャカ・キリスト・マホメット・マルクスという諸偉人の調和がない限り、世界諸民族の平和はないであろう。また、神秘の空想に逃げる者はあるいは怠け者にすぎないのかもしれない。

ひとりひとりが自立して協同する未来の美しい地球を想ってごらん。想うのはそれのみ。美しい地球。

安心に不安は勝てないのだ。

健康平和交流が一定に組織化すれば、安心の任意団体もよし。安心のNPOもよし。安心の協同組合もよし。安心の株式会社もよし。ともかくも、一億総白痴化から、一億総教祖へ、大逆転するべし。花開く道徳社産業のすすめ。日本道徳復興の物語。武道がより大切か道徳がより大切か。知識や雑学はコンピュータに記録しておく人間ならば健康平和への知恵を出しあおう。三人寄れば文殊の知恵。

われわれは特定宗教の押しつけに反対するが、資産増殖と軍事にとらわれた、道徳の否定にこそ反対する。ひとりひとり自分なりの道徳を創り使う自由こそを保護し推進するべきなのだ。そういう方向の礼儀と芸術なのだ。

かつてヨーロッパに芸術談義のカフェあり。

これからの日本民衆に素朴な道徳談義の仮設茶室あれ。

そこが安心の通信と会場ならそれで道徳社なのだ。

以上、この文章に賛同するもしないもあなたの自由なのだ。この文章の提案をJOMONあかでみいに断りなく具体化することも意欲あるあなたの自由なのだ。山田 学としては、社会が自由に平等に健康平和になれば、それが本望。

この文章を公開した責任は、もちろん、山田 学ひとりが負わせていただきます。ご一読感謝。

この文章は以下の文献に学びて書きました。

三浦つとむ『弁証法はどういう科学か』(講談社現代新書1968年)

沖 正弘『生きている宗教の発見だれでも悟り救われる沖ヨガ修行法』(竹井出版1985年)

吉本隆明『詩人・評論家・作家のための言語論』(メタローグ1999年)

吉本隆明『超恋愛論』(大和書房2004年)

南郷継正『武道講義入門弁証法・認識論への道一流の人生を志す人に』(二二書房1994年)

庄司和晃『認識の三段階連関理論』(季節社1992年増補版)

庄司和晃『人はなぜオカルトに魅かれるのか教育は宗教とどうつきあうか』(明治図書1997年)

庄司和晃『全面教育学入門渡世法体得という教育本質観』(明治図書1994年)

庄司和晃『柳田民俗学の子ども観』(明治図書1979年)

庄司和晃『コトワザ教育のすすめ未来の教育学のための文化研究』(明治図書1987年)

井沢元彦『点と点が線になる日本史集中講義』(祥伝社黄金文庫2007年)

百瀬明治『大実業家・蓮如親鸞を継ぎ日本最大の組織を創った男』(祥伝社NON BOOK 1988年愛蔵版)

猪瀬直樹『日本の信義知の巨星十人と語る』(小学館2008年)

日本未来学会編『宗教の未来』(東京書籍1994年)

川喜田二郎『素朴と文明』(講談社1987年)

川喜田二郎『ひろばの創造移動大学の実験』(中公新書1977年)

金子仁洋『地方再興官と族議員は地方の敵にまわるか』(マネジメント社2007年)

(昭和二十年ならぬ)平成二十年八月十五日

JOMONあかでみい校長 山田 学©

社社社社